

## 新たな言葉を生み出す質問の工夫 日本語によるナラティブ・セラピーの逐語的検討

遠山宜哉

Some devises of questioning that create new language expression :  
A word-for-word study on a narrative therapy session in Japanese

TOHYAMA Nobuya

ワークショップのデモンストレーションとして行われた日本語によるナラティブ・セラピーのセッション1例を資料として、カウンセラーの投げかけた質問にどのような工夫がなされているかについて考察を加えた。クライエントの語りの中に新たな言葉や新たな視点をもたらすように働きかけてはいるものの、それを実現するために、本人の考え、判断、意志などを直接には問わない、焦点化されない問いを提示するという慎重さが見られた。そのことは同時に、質問をすること自体の弊害を生み出さない工夫にもなっていることを明らかにした。

キーワード：ナラティブ・セラピー 質問 新たな言葉 焦点化されない問い

Using an example of a Japanese language narrative therapy session which was conducted as a demonstration of the workshop, we examined what kind of consideration was used for questions posed by the counselor. Although there have been efforts to bring new words and perspectives into the client's narrative, in order to actualize that, a discretion to pose questions which do not directly inquire about, or do not place focus on the person's thoughts, judgement, and intentions, was observed. It was observed likewise that this was also a consideration to avoid generating any harmful effects of questioning themselves.

Key words: narrative therapy, questioning, new language, question which do not place focus on

### Ⅰ. はじめに：援助的会話における質問

心理学的な援助関係において、質問は非常に重要な役割を果たしているのは言うまでもない。入江(2020)によれば、「ある意味では、会話の中でのすべての発話は暗黙的に質問の意味を持っており、また同時に質問への返答の意味も持っている」(p.243)とさえ言えるのである。そこまで極端な捉え方をしなくても、疑問文だけが質問ではなく(遠山 2018)、疑問文でも質問として機能していないこともあることから、視野を広く保って援助的会話における質問を検討する必要がある。

ところが、質問が単なる情報収集と考えられている、あるいは質問によって情報収集だけをするということが可能だと考えられている例が、専門的な文献においても少なくない。情報収集は質問の広大な世界のうち

のほんの一部の機能に過ぎないこと、情報収集をすることが同時にさまざまな影響を相手方に及ぼしてしまうことに無自覚なのは、論外のことである。

また、質問の機能をさまざまに考えていく上で、どのようなことを問うのか、という内容の側面に着目することは比較的重視されており、実際にいろいろの論考もある。特に家族療法や構成主義的心理療法では、質問が特有の名称を付けられて具体的に多数提案されている。しかし、質問の形がいくら提案されたとしても、それをどのような状況で、どのようなタイミングで、どのように提示すれば良いのかという、いわば運用の仕方についての議論はかならずしも十分になされているとは言えない。もちろん、状況やタイミングには無数の条件があり、一律に理論立てすることが難しいという事情があるのは事実である。しかし、そこを

論じないわけにはいかない。

国重（2013）は、援助的会話そのものを検討する必要性について、以下のように述べる。

（心理療法における）実際の言葉のやりとりを第一義的なものであるとみなすことは、それほど重要視されていないように感じています。たとえば、ケースカンファレンスでは、相手の語ったことが取り上げられますが、そこでは、私たちが「どのように語りかけたから、そのような言葉が返ってきた」ではなく、クライアントという人をどのようにみなすとか、問題をどのように解釈するかというところに、多くの場合焦点が当たっていきます。また、そのような場でさまざまな方策が検討されますが、前線で対応しなければならない私たちにとって最も重要なことは、「それをどのように実現するか」です。（p.7）

質問についても同じように「それをどのように実現するか」が問われているのである。

ナラティブ・セラピーの立場に立つ国重は、また、日本文化の下、日本語でこのアプローチをどのように実現するか、試行錯誤してきたと述べている。質問をどう実現するか、という観点からすれば、どの文化、どの言語の下でそれを論じるかは重要な点であり、どこにでも通用するような原理原則が見出される保証はない。そこで、日本語で行われるナラティブ・セラピーを逐語録から検討して、どのような運用がなされているのかを検証するのが本論の狙いである。ホワイトらは実に多様で工夫に満ちた提案を数多くしている（たとえばWhite 1988）が、日本語ではどのような形で運用するのが望ましいか、その手がかりも得られるであろう。

国重らは2020年に『ナラティブ・セラピーのダイアログ：他者と紡ぐ治療的会話、その＜言語＞を求めて』を刊行し、そこで、ワークショップにおけるデモンストレーションではあるが、国重自身がカウンセラーを務めた四つの面接の逐語録を世に問うている。私たちの会話は多かれ少なかれ、逐語に起こすと冗長になっているものだが、読みやすさを優先してその冗長な部分を削除してしまうということをせずに、敢えて読みにくいまま提示されていることから、この逐語録を分析に用いるのが適切と考え、詳細に検討してみることにしたのである。本論では特にカウンセラーの質問の

仕方の特徴に焦点を当てることとした。

## Ⅱ. 逐語録から質問のあり方を検討する

### 1. 取り上げる面接の逐語録について

上述した書物の4事例から、もっとも会話のターンの多い「さつきさんとのダイアログ」を取り上げて、そこでの質問のあり方について特徴と言えるものを抽出することとする。

なお、ワークショップのデモンストレーションのやりとりを写したものであるから、クライアントのさつきさんは国重の紹介するナラティブ・セラピーについての知識や経験を少なくとも最低限はお持ちである。また、クライアントとして名乗り出るだけの積極性や学ぼうという強い意欲があり、人前でみずからの経験や考えを開示するだけの開放性と表現力も備えておられる。つまりは、健常な方である。したがって、面接が今回のように展開したのは、クライアントの力に拠るところが大きいだろう。しかし、ここでは、このような面接が他より優れているかどうかということ問うものではなく、少なくとも成功裡に終わった会話が、こういうやりとりによって可能であったということ、を、しっかり確認しておくことが重要である。

### 2. 面接の流れを概観する

一つの面接におけるカウンセラーの質問を詳細に見ていく上では、面接全体の流れを知ることも必要であろう。表1は、逐語録には現れない言葉も補いつつ大幅に省略して全体を示したものである。ここから読み取れるのは、おおよそ次のような流れである。

母親との衝突をなくしたいという最初の訴えにまつわる話を聞いた（C6～12）後、母親とのどのような関係を目指したいのかを尋ね（C24～C32）、現状はどうなっているか尋ねている（C34～C42）。その中で一つの対処行動が検討される（C44～C58）が、それはクライアントだけが妥協していて対等でないという発言から、再度、対等であるためには何が必要かを検討し（C59～C63）、その対処方法についての歴史とこれまでの努力を尋ね（C65～C70）、その対処をどのように続けていけるかを確認し（C75～C84）、終結に向けた確認作業をして（C88）大方の面接を終えている。

表1 事例の概要

発言番号	母親とたびたび衝突するので、それをどうにかなくしたい
C6	なぜ、この時点でこの話をしてみたいのか
S①	心理学等の勉強をしても実地に使えない
C14	何が作用してうまく使えないと思うか
S②	母親と距離をとるのが良いのだが、それを伝えても機能しない
C24	どういう関係性を目指したいのか
S③	役割交代して助け合う関係でいたい
C29	その関係性をどう表現すれば良いか
S④	対等な関係
C32	お互いがそれぞれの人生をどうできれば良いか
S⑤	満喫する
C34	今はどの程度、その関係ができていますか
S⑥	落ち着いてきているが1ヶ月に1回くらいクラッシュ（衝突）が起くる
C35	クラッシュの日以外はどのような関係性なのか
S⑦	理想に近い気が付けないと溜まってきてクラッシュする
C42	バランスをとるのにどんな作用が二人の間に起こっているか
S⑧	空気を読み合う
C44	空気を読み合わないような状態としてどんなものがあり得るか
S⑨	母親に感謝を返すことには価値がある
C58	やってみるというのは可能性があると感じるが、どんな感じがするか
S⑩	私ばかり妥協している
C59～61	対等であるために必要なものは何か
S⑪	もうちょっと任せてもらえるといい
C62～63	必要なものは表現として何と言ったらよいのか
S⑫	一人前と認めてもらいたい
C65	一人前と認められることは、どんな経過をたどっていて、今はどのような状態なのか
S⑬	ちょっとずつ一人前の部分が増えた
C70	それができたのはどのような努力によるのか
S⑭	勉強したり経験したりしたことを含めて伝える努力をしてきた
C75	これからも続けられる可能性や大切さはどうか
S⑮	成果は確実に上がってきている
C77～78	ちゃんと続けていくために何が必要か
S⑯	一緒に学び考える仲間や（自分の）クライアントの存在
C83～84	クラッシュについてはどんな風に理解すれば良いか
S⑰	どんな距離でいたいのかを確認する作業をしておけば、将来もさほどしんどくない
C88	対等な関係性を目指す上で、尊重されず取り残されている気持ちはあるか
S⑱	今は、思い付かない

※ ここでは逐語録にある通りの発言でなく、言葉を補いつつ大幅に省略して概略を示している  
 ※ 逐語録の発言番号は97往復分ある。ここではCがカウンセラーである。なお、Sはクライアントを示すが、こちらはいくつかの発言をまとめているので丸数字で示してある。

づいていたのかどうか不明だが、気づいていたとしても、その矛盾を直接指摘することはなかっただろう。いずれにせよ、ここで会話に新たな展開が生じたのは、クライアントに「感じ」を尋ねたことによる。

「どんな感じがするか」という問いは、クライアント個人に、その責任においてどう考えるかという形で問うていないところが重要である。では、実際には何に答えさせているのかといえ、たとえば「あなたの無意識は何と言っているか」「身体は何と言っているか」といった本人の責任が直接及ばないところに聞いていることになる。フォーカシングで使われるような問いかけに似ていると言えるだろう。

この後、カウンセラーはC59で「どっちかというところ一方方向なわけですよ。さつきさんが取り残されているので」と珍しく断定的に述べており、その後は、どのように対等な関係を実現するかという方向にぶれずに進んでいくことになる。不公正な関係性に敏感なナラティブ・セラピーの特徴が現れていると言えよう。

### 3. カウンセラーの質問の特徴

#### (1) 「感じ」を尋ねる質問

この面接の中の大きな転換点の一つは、クライアントがS⑩で「私ばかり妥協してるみたいな感覚もちょっとあって……」と発言した局面であろう。母親との衝突を回避するには、母親にやってもらっていることに気づいてそれに言及し感謝の言葉を返すことは価値があると述べて、カウンセラーもいったん「（その方法は）なんか可能性があるのかなって僕は感じた」とまで述べている。しかし、カウンセラーは慎重にも、最後に「今話をされていてどんな感じがしていますか？」と尋ねている。それに対する反応がS⑯なのである。

振り返ってみると、目指す望ましい関係性は対等なものだったはずだが、クライアントだけが対処行動を起こす話になりかけている。カウンセラーはそこに気

#### (2) 新たな表現を促す質問

母親との新たな関係性を目指すというやりとりの中で、カウンセラーは次のように尋ねる。「こういう関係性はということがある関係性、どういう関係性と呼ぼう……」（C30）。これに対して、クライアントは「対等とか、普通のとか」と述べるのでカウンセラーは「対等」を選んで反応し、以後、ずっと「対等な関係」が会話の重要なテーマの一つになる。このやりとりで先立つ会話から見て、望ましい関係性について語っていることは明らかなので、この点について何か新たに尋ねるとすると、その関係性がどんなものか詳しく説明してもらうことが考えられるが、そうではなく、新たな言葉で表現することを求めている。この質問はクライアントのコメントにも「この類の質問が



一番難しいように感じた」(p.270)とあるように、答えやすいものではないのだが、新たな言葉を模索することで新しい地平が拓けることを期待してのことと考えて良い。ナラティブ・セラピーの考え方に拠っていると言って良いだろう。ここは、「何々と呼ぶ」というクライアントの主体性が明確なものになっている。

「私ばっか妥協」という関係ではなく、対等になるために必要なものが何か、カウンセラーは尋ねているが、そこでも同様の質問がなされている。つまり、「これって何なんだろう。なんて表現できるだろうか？」(C63)という質問である。ここでは「一人前と認めてもらいたい」という表現が生まれるが、上記の「対等な」と同様、会話の中の重要なキーワードとして使われていくことになっている。

### (3) 人を主語にしない質問

ナラティブ・セラピーでは外在化する会話が重要な位置を占めているが、ここでもクライアントを主語としない問いかけが多くなっているのは特徴的に見られる。

なぜ、このテーマで話をしようとするのかを尋ねた質問(C6)は、「今まであった中でなんで今日というかこの時点でね、この話をしてみたいという……。なんか、このタイミングって何をさつきさんに物語ってる……。というか……。どういうこととして見えているんですか？」という表現がなされている。「このタイミングは何を物語るか」「どういうこととして見えているか」という文体には、クライアントが主体となる意志の表現が何も求められておらず、ただ、そこにある事態とその意味を受け止めたままに話すように求めるものになっている。上述した「感じ」を尋ねる質問と通底している。

こうした質問の文体はあちこちに見出すことができる。

たとえば、母親との衝突回避に対して、これまで勉強してきた心理学が使えないというクライアントに対して、「で、そのね、なんかうまく使えないもんだなーっていうものは、何がこう……。そこに作用して、それほどうまく使えないという形になってるんだと思いますか？」という問いを発している。「さほどうまく使えないのはなぜだと思いますか？」という質問と比べてみると、「使う」主体の責任について何も問わない点が対照的であることが分かる。何かが「作用する」という言葉は他でも出てくるが、意志のニュアン

スを薄めるのに役立っている。

母娘でバランスをとろうとしていることについて、そこに「どんな作用が二人の間に起こってるんだろう」(C42)という発言でも「作用」が使われている。空気の読み合いという、互いの意図や推量が交錯する複雑な状況を、水彩のようにあっさりと尋ねるものになっていると言えよう。

### (4) 鋭く焦点化せず回答を強く迫らない共同探索的な質問

この逐語録でカウンセラーが発している質問は、その文末を見るといずれも鋭く焦点化されておらず、明確で断定的な回答を強く求めるところがない。

比較的直裁に尋ねたものとしては、「少し、教えてもらってもいいですか？」(C24)があるが、質問の内容を直接に尋ねずに質問の許可を求める形になっている。

さらに、「どの程度、実際、あの一あるような気がしますか？」(C34)、「どういうものであるっていうふうにこう、そこだけを見るといえるっていうか、言っているんだよって感じがしますか？」(C35)「どれだけ意味があることなんだろうかって……。いう、問いをかけたらどんな感じがしますか？」(C75)といった、「気がする」「感じがする」という言葉を緩衝材に入れた尋ね方が見られる。

また、「お母さんばかり、やりすぎているんじゃないかという話ですか？それとも……。」(C36)のような言いさし表現も少なくない。疑問文の形をとっていないが、これも意味的には質問だとすると、出現する回数は少なくない。カウンセラーのターンを88とするとき、「はい、はい」といった39の応答を除いた49ターンのうち、30ターン(65%)が質問であり、言いさしたまま終わっているものが12ターン(24%)ある。加藤(2016)のいう「言いさし表現」ということになる。

さらに、「どういう関係性と呼ぼう……。」(C30)、「やっぱり何かないといけない気がするんですけど、何なんだろう？」(C61)、「これって何なんだろう。なんて表現できるだろうか」(C63)などは、カウンセラーも共同して回答を探ろうとするような言語表現になっている。

### (5) 問いながら生成される質問

この逐語録を読む人間にとってもっとも強い印象を与えるのは、カウンセラーの何かを探りながら発せられる、輪郭のはっきりしない質問であろう。これは同

じ逐語録に対するコメントにも書かれている。坂本(2020)は「ある種わかりにくい問いかけ」と評し、「カウンセラーが曖昧な形で問いかけることには、クライアントの中にこれまでとは異なる言葉が生まれる余地を与えることにつながる」(p.308)と述べる。また、同じ本の別の逐語録へのコメントでも、大串(2020)は「カウンセラーの、迷いながら、行ったり来たりしながら発される言葉を、ほんやりとした言葉のかたまりとして聞いて、そこから自分に響いた単語に答える、そんなやりとりになっているのではないかと思います」(p.206)と述べている。

逐語録の中盤には次のような質問も現れる。母親との間で空気の読み合いをしていると言うクライアントに対して、「で、もし空気を読み合わない次元の話を……もし……僕どういふのを聞いているかよくわからないんですけど、読みあわないような状態っているのをできるとすれば、というかするとすればどんな形のものか……そこではあり得るんですか?」(C44)と問う質問である。要約すれば「互いに読み合わない状態があるとしたらどんなことがあり得ますか?」という質問になるだろうが、どんな風に答えてもらえば良いかということについて方向性なしに聞いている、という趣旨であろう。この質問に対してクライアントのコメントがある。「[「どういふのを聞いているかよくわからない」と言葉にしてもらうことで、一緒に考えてもらっている感覚になる。整った形で質問されてるわけじゃないから整った形で答える必要はないと、またハードルが下がる」(p.275)と。どんな人がクライアントになってもこう受け止められるというわけではないだろうが、しっかりと形の整った、方向性も定まった質問でなく、逐語録に「……」と書き表されるようなためらいや試行的な発言、言いよどみ、などが、カウンセラーも考えながら、そして質問を生み出しながら進めていることを身をもって示し、そのような会話のあり方で良いのだ、というクライアントへのメッセージになっていると考えることができよう。互いに考えながら会話を創造していくように誘いかけていても言える。したがって、クライアントも試行的に、いろいろな言葉を試してみて、じっくりくる感覚を探りながら発言することができる。

どのように問いかけるか、問いかけながら考えて進めると、同じ一つのターンの中に複数の質問が行われることが生じる。たとえば、母親との望ましい関係に

ついて尋ねる最初の質問である。「……こんななか目指したいという関係性というか、こうありたいのが、なんかこうイメージとしてある……ような気がしますか？　こういうところになんか……行きたいとか、なんかそういうところがあってから、なんかそこにたどり着こうと、今知識をなんか使おうとか、なんかそういうイメージなんですか？　それとも、逆に、こうこれからどういう関係性になっていいのかわからないというようなレベルの話なのか……少し、教えてもらってもいいです？」(C24) さほど混乱を招く恐れはないにしても、これは調査面接や質問紙調査の領域では二重質問、ないし多重質問と呼ばれて、避けるべきとされる問いの仕方であるが、さまざまな問いの表現を工夫しながら、その工夫の過程を見せることの方を重視している結果であろう。

#### IV. 新たな表現を生むための共同探索の質問

援助的会話において、質問の位置づけは大きい。質問が疑問文の形に限定できないことを考えればなおのことである。入江（2020）の考え方に立つならば、質問を論じることは援助的会話を論じることに等しいとさえ言える。

しかし、質問が、その侵襲性の程度はさまざまでも、それが問う相手に伝えられる限り、何らかの影響を与えることになる。だからこそ問うのではあるが、問うことの否定的な影響を常に考えておかねばならない。それへの対処は大きく分けて、質問を極力避ける方向と、質問の内容とその提示の仕方を工夫する方向とがあろう。極限ではその両者の区別は付けにくいかも知れないが。

上記3. で論じた質問の提示の仕方は、日本語におけるナラティブ・セラピーの一例として、分析・検討したものであり、それがクライアントにとってこれまでになかった言葉を発見し、あるテーマについての新たな語り方を見出していくのを助けるべく工夫されてきたもののはずである。したがって、質問がもつ否定的側面がなるべく顕在化しないように尋ねることだけを考えて工夫されてきたものではないにもかかわらず、そこには共通の工夫がなされていることを明らかにすることができた。

Benjamin (1987) の『カウンセリング入門』という有名な教科書は、質問についてたいへん大きく頁を割いているという点で注目すべき書物である。ここに

は、「二重質問だったり、多重質問だったりしないで、はっきりした単純な質問にすることである。できる限り簡単明瞭にしながら、あいまいでなくわかり易い質問にすることである。」(訳書p.262)と書かれている。もともと質問は少なければ少ないほど良いという考えで書かれているのではあるが、質問をするのであれば、クライアントを惑わせないようにすべきということであろう。

しかし、今回の逐語録に限らず、ナラティブ・セラピーの提唱者であるWhiteの会話のやりとりをみると、多重質問は多く出現している。たとえば、Whiteが再著述する会話について述べた部分では次のような質問が出てくる。「自分を信じる行為があなたの人生にどんな影響を及ぼしたか、何か感じることはありますか？ あなたが自分自身についてどう感じるかとか？ あなたの人生についての新たな気づきとか？ あなたとおばさんやおじさんとの結びつきとか？ 何でもいいんです。」(White 2007 訳書p.95)といった具合である。質問の最後にあるように、どの問いにどのように答えれば良いかを厳しく求めている点が増える。

また、問いながら不断に修正しつつ語られる質問も、それに答えようとしている者にとって、分かりにくい、捉えにくいものになることが十分に考えられる。これもBenjaminの「わかり易い質問」という方針にならずしも従おうとしていない。

しかし、ここで明らかにしてきた逐語録における質問は、これまでの典型的な教科書の指針には従おうとしていないが、質問の否定的な側面を顕在化させないという方向性には完全に対応していると言えるのではないだろうか。この辺りの事情について、国重(2013)は以下のように述べる。

外在化する会話法で質問をしていくと、一回では意味が通じないことが往々にしてあります。または、意味が通じたとしても、どのように答えたらよいのか考えるのに時間がかかるときがあるでしょう。この会話法は、本人にありきたりの表現ではない方法で、答えを返すように求めるものです。そのため、生返事をするのができないと感じるかもしれません。(国重 2013 p.25)

新しい語りを生み出すために「ありきたりの表現で

はない方法で答えを返すように求め」ているがために、問いかけるカウンセラー自身も初心のうちは苦勞するのであり、そこを乗り越えるには「それなりの勇気と努力、そして慣れ」が必要だと述べる。カウンセラーにもこれだけの負荷がかかるのだから、クライアントにも当然、戸惑いをもたらすであろう。焦点化されない、構造化されない質問を受けること自体で混乱を来してしまうようなクライアントについては、もちろん別の対応をするとしても、クライアントの戸惑いや混乱を最小限にする必要がある。

その工夫の一つが共同探索的な質問ということであろう。カウンセラーが質問の形をあれこれと焦点化させずに構成していくのを見て、クライアントも焦点化されない自由な応答をすることが受け入れられていると感ずるであろう。彼我の区別をあえて明確にせずに、「どういう関係と呼ぼう」といった問いかけをするのもこうした働きかけと言って良い。極力侵襲性を高めまいとするこうした丁寧で、間接的で、距離を置いた尋ね方には、ネガティブ・ボラリティネス(滝浦 2008)が発揮されていると考えることができる。クライアントに対して敬意をもって接し、侵襲的になることを可能な限り避けようとすることは同時に、そこには少しの距離ができることになる。共同探索とはいえ、むしろ質問の担い手は徐々にその存在感を薄めていく方向にあることになるのではないだろうか。この点については、リン・ホフマン(Hoffman 1992)が「専門家を消し去る」ことで、「クライアントの参加と創意を促す」ことができると述べているが、専門家が消されるだけでなく、人としてそこにあるという重さが消え、会話が会話を作っていくという側面が認められる。

ただし、今回の逐語録でも、「私ばっか」の発言から「一人前と認めてもらいたい」という言葉に至ってからは先では会話は急速に動いており、カウンセラーが方向性を明確にしている。カウンセラーが会話自体の生成力にすべてを委ねているわけではないことは確認しておきたい。

なお、質問の否定的側面をいかに克服するかというテーマで遠山(2018)が示した数々の論点について、今回の逐語録における質問のあり方とを一つ一つ突き合わせることは、紙面の都合上、ここでは行わない。



## V. 意志と責任の語りからの解放：中動態という考え方を手がかりに

「人を主語にしない質問」という形でまとめた、この逐語録での質問の特徴についてさらに検討を加えたい。

私たちは「山が見える」「声が聞こえる」「ドアが閉まる」「この道具は使いやすい」などといった表現を日常的に使っている。これらは受動態にしにくい表現である。そこには、「私が山を見る」「私がドアを閉める」という意志と責任の部分が見当たらないからであろう。言語哲学の領域では「中動態」という言葉がある。國分（2017）によれば、能動態と言えるような文でも、次のように考えることができるという。

「私が歩く」という文が指し示しているのは、私が歩くというよりも、むしろ、私において歩行が実現されていると表現されるべき事態であった。つまり、能動の形式で表現される事態や行為であろうとも、それを能動の概念によって説明できるとは限らない。（p.20）

國分によれば、現在、能動態と受動態が対立的に捉えられているが、それは決して普遍的なことではなく、受動態に先立って中動態という形があったという。

ところが、能動と受動を対立させる言語は、行為にかかわる複数の要素にとっての共有財産とでも言うべきこの過程を、もっぱら私の行為として、すなわち、私に帰属するものとして記述する。やや大袈裟に、出来事を私有化すると言ってもよい。「する」か「される」かで考える言語、能動態と受動態を対立させる言語は、ただ「この行為は誰のものか」と問う。

ならば次のように言えよう。中動態が失われ、能動態が受動態に対立するようになったときに現れたのは、単に行為者を確定するだけではない、行為を行為者に帰属させる、そのような言語であったのだ、と。出来事を描写する言語から、行為を行為者へと帰属させる言語への移行——そのような流れを一つの大きな変化の歴史として考えてみることができる。（p.176）

つまり、こうした言語表現の転換の背景には、大きな思考の転換が起こっていたと考えられる。

中動態についての議論をこれ以上深める力量が筆者にはないが、これはナラティブ・セラピーを考える上でのヒントとなる発想ではないだろうか。ナラティブ・セラピーでは「外在化」を重視しているが、これも、われわれが現在生きているこの文化を「内在化する文化」として捉え、内在化する語りから離れる手助けをすることで新たな語りが生まれ、自分の人生を取り戻せる、という考え方の現れである。

外在化の語りは中動態の表現と同じであろうか。個人の意志と責任を、「私」に帰属するものとする語りから離れて新たな語りができれば良いのだが、それは何かを外在化して語ることと等しいのであろうか。影響相対化質問をみると、困りごとをもたらしXから私が影響を受ける側面と、私がXに影響を与えている側面とを語っていくことによって相対化が生じるとする。つまり、外と内に彼我の対立軸を想定していると言える。今回の逐語録でみたカウンセラーの質問は、そのような対立軸がみられたであろうか。かならずしも、何かを外在化したとも言えない問いかけがあったのではないか。

たとえば、「なんか、このタイミングって何をさつきさんに物語ってる……というか……どういうこととして見えているんですか？」（C6）では「見えている」という表現が使われている。「見えている」のではなく「見えている」という主語や主体のない聞き方である。「気がしますか？」「感じがしますか？」といった表現も同様であり、あくまでクライアントは受身になって何かを感じ得られるのを待って、それを表現するように求めている。その際、内在化していたものを外在化させた上で語るように誘っているわけではないであろう。クライアントに何かを感じさせているものの、何かを見せたり聞かせたりしている特定の主体を想定する必要がないのであれば、何をもってきても「それはあなたに何を語っていますか」という問いかけが可能である。無意識や身体からのメッセージを問うことも可能である。そして、そのことがクライアントの窮屈な語りを自由にする可能性をもたらし得よう。

## VI. まとめ

国重らの貴重な逐語録の公開を機に、興味深いナラティブ・セラピーのセッションをもとにして、カウンセラーの質問について論考した。もとよりデモンストラーションにおける会話であり、それも一事例だけ

の分析であるから、そこから見出したことも限定的に考えねばならない。特に、臨床場面については、条件が大幅に異なることから安易な応用を考えてはなるまい。ただし、ここでみたような会話、そしてそのための問いかけが実際に展開可能であったことは事実であり、そこには試行錯誤を重ねてきたカウンセラーの経験と努力が反映されているのもまた事実である。

援助的会話における質問について、その運用の仕方を論じるには、やはり一挙に抽象的な原則を立ててしまうのではなく、どういう問いかけの仕方が可能であり、どういう受け止めがなされ反応があらわれるのか、丹念に検討していくしかない。ある質問のしかたについて、その働きを後付けでたどることしかできないとしても、質問の可能性を探り会話を豊かなものにしようとする臨床家には、それは役に立つことだろうし、臨床家どうしの議論がなされることによって、本論で得られたような知見は深みを増していくことだろう。

終わりに、一言一句も逃さずに逐語に起こすという姿勢で資料を提供して下さい。下さった国重氏を始め、その逐語録に対してそれぞれ刺激に満ちた分析を加えて示して下さい。著者の皆さんに敬意を表したい。私もその検討の仲間に入れて欲しくなり、愚考を巡らした次第である。

※本論に先立って、横手興生病院の松田陽一氏と意見交換することができた。記して感謝したい。

## 引用文献

- Benjamin, A. 1987 *Helping Interview* 3rd edition with Cases. 1987 (林義子・上杉明訳 1990 *カウンセリング入門：支援する心と技術* 北大路書房)
- Hoffman, L. 1992 *A Reflexive Stance for Family Therapy*. In McNamee, S. & Gergen, K. (ed.) *Therapy as Social Construction*. Sage Publication. 7-24. (野口裕二・野村直樹訳 1997 *家族療法のための再帰的視点* マクナミー、ガーゲン編 *ナラティブ・セラピー：社会構成主義の実践* 金剛出版 pp.23-57)
- 入江幸男 2020 *問答の言語哲学* 勁草書房
- 加藤澄 2016 *サイコセラピー臨床言語論：言語研究の方法論と臨床家の言語トレーニングのために* 明石書店
- 國分功一郎 2017 *中動態の世界：意志と責任の考古*

学 医学書院

- 国重浩一 2013 *ナラティブ・セラピーの会話術：ディスコースとエイジェンシーという視点* 金子書房
- 国重浩一・横山克貴編著 2020 *ナラティブ・セラピーのダイアログ：他者と紡ぐ治療的会話、その＜言語＞を求めて* 北大路書房
- 大串綾 2020 *鈴木さんとのダイアログをめぐって①* 国重浩一・横山克貴編著 *ナラティブ・セラピーのダイアログ* 北大路書房 pp.196-214
- 坂本真佐哉 2020 *さつきさんとのダイアログをめぐって②* 国重浩一・横山克貴編著 *ナラティブ・セラピーのダイアログ* 北大路書房 pp.303-317
- 滝浦真人 2008 *ボライトネス入門* 研究社
- 遠山宜哉 2018 *いかにして好奇心を伝えるか：援助面接における質問の弊害とその対処* *ブリーフセラピーネットワーク* 19, 21-33.
- White, M. 1988 *The Process of Questioning: A therapy of literary merit*. *Dulwich Centre Newsletter*, (Winter) 8-14.
- White, M. 2007 *Maps of Narrative Practice*. NY : W.W.Norton (小森康永・奥野光訳 2009 *ナラティブ実践地図* 金剛出版)